

麦本三步は今、うっそうと生い茂る森の中を歩いている。それも怖い先輩と一緒に。

何故そうなったかと言うと、今朝の出来事が関係している。

今朝、地下室で作業をしていたら停電が起きた。陽気な三步もそれなりにアタフタした。それなりに。しかし無事におかしな先輩が助けに来てくれ、三步は一命を取り留めた。無事に作業を終え家に着いた時、鍵が入った鞆をロッカーに忘れておくことに気付き、図書館へ戻る。おかしな先輩とよくわからない会話を交わし、帰っているところでコンビニの前で怖い先輩がバイクに乗ってスマホをいじっている姿が目に入った。怖い先輩とあだ名をつけているのだから、話しかけなければいいものの、そこで話し掛けてしまうのが三步なのだ。だって三步は怖い先輩が怖いのは仕事の時だけと知っているから。怖い先輩は実は料理をおごってくれる優しい先輩だと知っているから。怖い先輩が優しい先輩になるなら、優しい先輩はとても優しい先輩に昇格するのでは？と考えながら優しく怖い先輩にお疲れ様ですと声を掛ける。今回は嘸まなかった。

よし、と人目をはばからずガッツポーズをしている三步だったが、すぐに怖い先輩の声が聞こえないことに気が付いた。怖い先輩の方を見るとなにやら手元のスマホに夢中で三步に気付いてないらしい。それならバイクの後ろに乗って驚かせてやろうとバイクに近付くと、人の気配を察知したのか三步の方を振り向いた。振り返ると思っただけだった三步はその場で左足と両手を上げた状態で静止すると、三步じゃん怖い先輩は驚いた声を出した。

「こんなところでなにしてんの？」

スマホを持ったまま怖い先輩は三步を見る。

「見かけたので声を掛けようとおもいましへ」

珍しく怖い先輩が怒っていないというのに、三步はいつものように嘸んでしまった。いや、別に怖い先輩が四六時中怒っているというわけではないのだけれど。

「いや、でもそうはならないでしょ」

そう言っただけ怖い先輩は呆れたような顔をした。ちょっとくらい笑ってなくてもいいのに。

「別に乗ってもいいよ」

その言葉がバイクのことだと気付くまでに三十秒は掛ったが、理解すると後部座席に勢いよく座り、怖い先輩に抱きついた。

「やめろ、抱きつくな」

喜んでくれると思ったのに、と頬を膨らませる三步であったが、周りの目もあるので仕方

がなく両手を太ももの上に置いた。

「今日は大変だったね」

「いや、そうでもなかったですよ」

先輩の気遣いをスルーする三步。それを気付かず赤く染まっている空を見上げる。

「闇と友達になったんです」

「闇？」

いつもなら「は？」という一音で返されそうな言葉を怖い先輩は真摯に聞いてくれる。やっぱり優しい先輩に昇格するべきだろうか。すると優しい先輩はとても優しい先輩になるのか？とさっきと全く同じことを考えながら闇も物質だったことに気付いたことについて説くと、怖い先輩はふーんと曖昧な相槌を打った。その感情はどっちだ。

「じゃあ闇繋がりで、ここ行ってみようか」

そう言って振り返りながらスマホの画面を見せてきた。初めて見る怖い先輩の意地悪そうな顔。その顔をたまに見ているある有名な探偵ものの犯人に似ていたことに気がき、今から自分は何かしらの事件に巻き込まれるんじゃないかと怯えていたが、連れてこられたのは山だった。

そして今に至る。

昼から何も食べていない三步のお腹はグーグーと悲鳴をあげていた。これなら怖い先輩が止まっていたコンビニで何か腹ごしらえになる食べ物を買っておけばよかったと後悔する三步。通りで食べたい焼きが恋しい。

完全にご飯のことで頭がいっぱいになっている三步。上の空という文字がある通り、上を見ながら歩いていると何かにぶつかった。いてっ。

ぶつけた額を撫でてみると、ぶつかったのが目の前を歩いていた怖い先輩だということに気付く。どうやら怖い先輩は立ち止まったらしい。

「どうかしました？」

三步がこんなに嘸まないことは珍しいことだ。いや、一回嘸んだがそんなことは三步の目には入っていない。もしかしてもう自分は嘸まないのではないのかと密かに自分を褒めながら怖い先輩の後ろから顔を覗く。三步と怖い先輩の周りには伐採されたであろう開けた場所が広がっていて、三步の真横にポツンと切り株が居座っていた。

「三步、上見てみなよ」

意地悪そうな顔をして怖い先輩は上を指差す。本日二度目の意地悪そうな顔に今度は隕石が落ちてくると思った三步は目をつぶりながら上を向いた。

「目をつぶっても何も起きないから」

笑っているのか怒っているのかよくわからない口調でツッコまれた三步は恐る恐る目を開ける。

そこには円を描く^{えが}ように切り抜かれた星空が見えた。

「隕石、落ちてこない」

「は？」

てっきり星の感想を言ってもらえると思っていたのか怖い先輩はいつものように三步を怒る口調で言った。やっぱり怖い先輩は怖い先輩のままだ。怯える三步。

「もしかして三步、今まで私が隕石落とすとも思ってたの？」

「はい、事件に巻き込まれるのかと」

微妙に会話が成り立ってないが、これも三步のいつもの調子。朝だろうが夜だろうか三步は三步のままなのだ。

「意味わかんない」

暗くて怖い先輩の顔は見えなかったが、三步には笑ったように見えた。その瞬間、怖い先輩は三步自身に笑顔を見せる為に自分を連れてきたのかとよくわからない勘違いをした。やっぱり怖い先輩は優しいのかもしれない。

そう思いながら、星を見上げた。